

くす通信

第165号
2014年11月1日

国立病院機構熊本医療センター 発行

消化器内科より

・脂肪肝とウイルス肝炎について

薬剤科より

・ウイルス肝炎の治療薬について

栄養管理室より

・肝臓病教室案内について



「くす(樟)」の由来について

くす(樟)は常緑の広葉樹で、熊本城内に多く見られます。種々の精油成分を含み、良い香りがします。樟脳をはじめ色々な薬用成分が抽出されるなど有用な薬用樹でもあります。
また、くすし(薬師)とは、医師のことを指し、くすしぶみ(薬師書)は医療に関する書物のことを言います。
本誌はこの「くす」にあやかり、健康な生活を送るために情報を提供しております。お気軽にお読み下さい。



薬剤科より

ウイルス肝炎の治療薬について

薬剤師 迫田和樹

B型肝炎の治療薬

ペグインターフェロン(皮下注射)や核酸アナログ製剤(経口薬)が用いられます。

ペグインターフェロン

ウイルスの増殖を抑える作用と免疫力を高める作用があります。一定期間治療を行った後は投薬なしで治療効果が持続し、耐性ウイルスを生じないといった利点がありますが、治療中は週1回の通院が必要であり、発熱・悪寒など様々な副作用が見られます。

核酸アナログ製剤

ウイルスの増殖を強力に抑える作用があります。経口薬という治療の簡便さと短期的には副作用がほとんど見られないといった利点がありますが、投与中止による再燃率が高いため長期継続が必要であり、耐性ウイルスを生じる可能性があります。最近では、より耐性ウイルスを生じにくいものも出てきており今後に期待されています。

C型肝炎の治療薬

基本はペグインターフェロンが用いられますが、2014年11月の時点では、下図に示すようにグループによっては抗ウイルス薬(経口薬)との併用で治療します。また、2014年9月には経口薬のみでの治療法も認可され、今後に期待されています。

抗ウイルス薬

ペグインターフェロンと併用することで治療効果が高まります。貧血や皮膚症状などの副作用や他の薬との飲み合わせに注意が必要です。リバビリンは催奇形性の懸念があるため妊娠中・授乳中は投与禁忌であり、治療中・治療後6か月間は避妊する必要があります(パートナー含む)。

	遺伝子型	
	1型	2型
高ウイルス量	<ul style="list-style-type: none"> ペグインターフェロン+リバビリン+シメプレビル ダクラタスビル+アスナプレビル(インターフェロン不適格例) 	<ul style="list-style-type: none"> ペグインターフェロン+リバビリン
低ウイルス量	<ul style="list-style-type: none"> ペグインターフェロン単独 インターフェロン単独 ダクラタスビル+アスナプレビル(インターフェロン不適格例) 	<ul style="list-style-type: none"> ペグインターフェロン単独 インターフェロン単独



栄養管理室より

肝臓病教室案内について

栄養管理室長 松永直子

肝臓病教室は、入院患者様と外来患者様を対象に、第3金曜日の午後3時半から、消化器内科医師、病棟看護師、薬剤師、臨床検査技師、管理栄養士の構成メンバーにより、年8回開催しています。講義内容は、毎回テーマが変わり、ご希望の回(栄養管理室ホームページで案内)に参加出来ます。患者様同士の話や質問・相談を伺う等、ふれ合いを大事にした教室となっています。また7月28日の世界肝炎デーには、患者様と家族の交流を目的とした「二の丸かんかんカフェ」の開催や、12月に一般の方を対象とした公開肝臓病教室を通じて、患者様へ最新の医療を提供していく教室になるようチームで取り組んでいます。是非ご参加下さい。

二の丸かんかんカフェ
開店のご案内

肝臓病と診断されている、治療中、あるいはこれから治療予定の患者様、肝臓病に関心のある皆様へさきどきな悩みや疑問の相談、病気や治療の貴重な体験、あるいは病気に関する情報など、ゆたかに話を聞かせながら、二の丸かんかんカフェは、肝臓病の患者様や病気に関心のある方への交流の場を提供いたします。どうぞお気軽にご来店ください。

※ご利用メニュー
- 肝臓病のトピックス
- 肝臓病治療の体験談紹介
- ほか4メニュー

日時:平成26年7月26日(土) 13時~15時
場所:国立病院機構熊本医療センター 附属看護学校2階 入場料は無料です(事前に消化器内科予約)※お忘れ物ありません!
主催:国立病院機構熊本医療センター 肝臓病教室委員会 (消化器内科・栄養管理室・病棟看護師・臨床検査技師・薬剤師・放射線科) 後援:熊本県、二の丸肝臓病教室

平成26年7月26日「かんかんカフェ」の様子



国立病院機構熊本医療センター

診療科

■ 総合医療センター	総合診療科、血液内科、呼吸器内科、糖尿病・内分泌内科、腎臓内科
■ 消化器病センター	消化器内科
■ 心臓血管センター	循環器内科、心臓血管外科
■ 脳神経センター	脳神経外科、神経内科
■ 感覚器センター	眼科、耳鼻咽喉科、皮膚科
■ 画像診断・治療センター	放射線科
■ 救命救急センター	救急科
■ 精神科	■ 小児科 ■ 外科 ■ 整形外科
■ リハビリテーション科	■ 泌尿器科 ■ 産婦人科
■ 歯科口腔外科	■ 形成外科 ■ 麻酔科 ■ 病理診断科

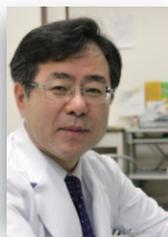
● 診療時間 8:30～17:00
● 受付時間 8:15～11:00
● 休診日 土・日曜日および祝日

〒860-0008 熊本市中央区二の丸 1-5
TEL 096 (353) 6501 (代表)
FAX 096 (325) 2519
H P <http://www.nho-kumamoto.jp/>

急患は
いつでも
受け付けます

消化器病センター (消化器内科、内視鏡室、超音波診断室)

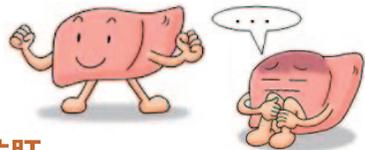
外来診療は月曜日から金曜日まで毎日おこなっており、杉部長、中田医長（超音波診断室長）、尾上医長（内視鏡室長）、石井医長、本原、松野、柚留木、持永、市川の9人の消化器内科医が、3人ずつ交代で診療に当たっています。診療内容としては、消化管疾患、肝臓病、胆道疾患、膵臓病をはじめ消化器病全般を幅広く扱っています。特に、B型・C型慢性肝炎、肝硬変、肝がんや最近注目を集めている非アルコール性脂肪性肝疾患（NAFLD）については新しい診断法および治療法を積極的に導入して診療に臨んでいます。増加傾向にある早期胃がんの内視鏡治療（ESD）、胆管結石の内視鏡治療、難治性腹水に対する腹水濾過濃縮再静注（CART）療法など、各領域のエキスパートが治療にあたります。また、患者様との情報交換を目的に、毎月第3金曜日に肝臓病教室、7月に二の丸かんかんカフェ、12月に一般の皆様を対象に公開肝臓病教室を開催していますので、是非ご参加ください。案内は栄養管理室ホームページまたは消化器病センター受付にあります。



脂肪肝と ウイルス肝炎 について

消化器病センター長・消化器内科部長
杉 和洋

近年、肝臓病に対して国民の関心が高まり、国はその対策に力を入れています。肝臓は沈黙の臓器と呼ばれ、特に慢性肝疾患は、症状がないままに進行し、気付いた時には肝硬変へ進行し、肝臓がんができていたことも少なくありません。本邦には慢性肝疾患の中でも、脂肪肝患者は1000～1100万人、B型肝炎ウイルス持続感染者は110～130万人、C型肝炎ウイルス持続感染者は170～200万人と推計されています。今回は肝臓病のなかでも大きな位置を占めている脂肪肝とウイルス肝炎についてお話しします。



熊本県肝炎対策
マスコット
カンゾーくん

脂肪肝

健康診断における肝機能異常の多くはこの病気で、年々増加傾向にあります。肝細胞に中性脂肪が沈着した状態で、原因として飲酒と飲酒によらないものがあり、後者は**非アルコール性脂肪性肝疾患（NAFLD）**と呼ばれます。その中でも炎症を伴う**非アルコール性脂肪肝炎（NASH）**は肝硬変へ進行し肝がんを発症することがあります。近年、B型肝炎でもC型肝炎でもない非B非C型の肝がんが増加してきていますが、**NASH**がその多くを占めていると考えられています。**NAFLD**は生活習慣病を背景とすることが多く、特に内臓脂肪沈着との関連がわかっています。脂肪肝といっても侮れません。脂肪肝と言われた方や脂肪肝炎の疑いのある方は、専門医を受診してください。

ウイルス肝炎

半年以内に治る急性肝炎と長年にわたり持続する慢性肝炎とに分けられます。原因として**B型肝炎ウイルス（HBV）**と**C型肝炎ウイルス（HCV）**が8割を占めています。**HBV**に小児期で感染すると持続感染となり、大部分は無症状で経過しますが約1割は慢性肝炎を発症します。成人の感染ではほとんどが急性肝炎で終わります。しかし、近年ジェノタイプAと呼ばれる外国からの**HBV**が増加し、10%が慢性化するといわれています。また、急性肝炎で治った後に抗がん剤や免疫抑制剤の投与で再びB型肝炎を発症することがあり、最近問題になっています。従ってB型肝炎の予防が重要です。治療には皮下注射のペグインターフェロンまたは経口薬の核酸アナログ製剤が用いられます。

HCVでは急性肝炎の約6～7割が慢性肝炎へ移行し、多くが肝硬変に進展し、肝がんを併発します。慢性肝炎は1型・2型、高ウイルス量・低ウイルス量で4つのグループに分けられ、1型低ウイルス量あるいは2型では80～90%が治ります。20年前は5%の治癒率だった1型高ウイルス量では、現在90%近くまで治るようになりました。治療の基本はペグインターフェロンですが、グループによってはいくつかの抗ウイルス薬との組み合わせで治療します。平成26年9月より病状によってはインターフェロンを用いない直接抗ウイルス作用を持つ経口薬の組み合わせによる治療が可能になりました。治療方針の決定や治療中および治療後の観察には専門的な知識が必要ですので、必ず専門医の指示に従ってください。熊本県ではウイルス肝炎医療費助成と無料検診が受けられます。詳しくは**熊本県肝炎対策 HP** (<http://www.pref.kumamoto.jp/site/kanen-taisa-ku-sub/>) をご覧ください。

脂肪肝もウイルス肝炎も早期診断と適切な治療が必要です。健康診断で肝機能に異常があると判定された方や肝臓に不安がある方は、消化器病センターをおたずねください。適切な診断と治療ならびに生活指導等をご提供いたします。